2016.9.5 Ym

今日のノート

呼吸器からの風

ゴォーと人工呼吸器から漏れる空気音が、言葉を押し出しているようだった。「何のために生きていくんだって考えなくても生きていけるんだけど、障害を持っていると、それが重度であるほど、何のためにそこにいるの、とか言われるんだよね」

全身の筋力が低下する「脊髄性筋萎縮症」の海老原宏美さん(39)(東京都東大和市)は、生きる意味を問われるのがしんどいと言う。人工呼吸器を使う重度障害者を追ったドキュメンタリー映画「風は生きよという」の一場面である。海老原さんに向けられたのは、重い障害がなければめったに突きつけられることのない、難問だろう。

神奈川県相模原市の知的障害者施設で46人が殺傷された事件で、容疑者は「障害者なんていなくなればいい」と供述した。事件前には「ヒトラーの思想が降りてきた」と話していたという。優良な子孫だけを残すとした「優生思想」のことだろう。ナチスドイツは、この考えにもとづいて障害者を虐殺した。

とうてい理解できるはずもない動機だが、特異な容疑者による特異な事件とは思えない。

映画「帰ってきたヒトラー」で、現代によみがえったヒトラーは、みずからを指導者に選んだのは大衆だとし、こう続けた。「私は人々の一部なのだ」

海老原さんらは人工呼吸器からの空気を「風」と呼ぶ。風をさまたげるような差別の芽はいま、人々に潜んではいないか。

社会部次長　犬伏一人